

年 頭 所 感

日本臨床生理学会理事長 三宅 良彦

本学会は、単一領域の医学・医療専門家による専門的な学術集会ではなく、様々な専門家が臨床生理や病態などを広く、ときに深く、また学際的に考察することを目的として活動しております。異領域の専門家たちが集い、発表や意見交換を行うことはもちろんですが、時代にふさわしい活動も実施したいと考えております。

●異領域の知識・情報を吸収する

医学・医療の進歩は凄まじく、各自の専門領域でさえも納得できるほどの情報収集や理解することは困難となっています。それでもそれぞれの専門の学会や研究会などを通じて、新しい知識や情報を可能な限り習得するよう努めるわけです。

一方、かつて学んだ非専門領域の知識は時とともに薄れることに加え、新しく、かつ有用な情報を獲得するには相当の努力が必要となります。これに対して本学会は、意義深い知識や情報を的確に提供したいと思っております。

●臨床生理学はこれからの時代の医療を支える

医療制度を「病院医療」と「在宅医療」に区分した場合、医療財政や高齢化の進行などいくつかの要因から「在宅医療」の比重が非常に増すことは間違いありません。すでに行政や医師会の対応もそちらに向けて舵をきっておりますし、2016年度診療報酬改訂の基本方針においても、地域包括ケアシステムの推進や「かかりつけ」機能の充実を強く謳っております。医学生グローバル・スタンダード新カリキュラムにも、近い将来変更となる初期臨床研修医プログラムにも、また間もなく開始される新専門医制度における専門医研修プログラムにも、これらが組み込まれることになるでしょう。

言うまでもなく在宅医療においては、CTやMRIといった携帯不可能な医療機器を使用しない診療が中心となります。したがって、これまで以上に、医師は在宅現場で駆使できる臨床能力が求められ、その基礎力としての臨床生理学への理解や再認識がさらに重要となります。

●あらゆる医療人が日本臨床生理学会で学ぶ

包括ケアやかかりつけ機能を担当するのは医師だけでなく、看護師、薬剤師、介護職員などのメディカル・スタッフが活躍します。医師連携はもちろんのこと、多職種連携もすぐれた機能を発揮しますし、ビュートゾルフといった革新的な在宅ケア組織も登場してきていることから、これまで以上に医療人が協力して診療活動に携わることになるでしょう。

こうした状況を反映して、看護師においては特定（医）行為を行う「特定看護師」の育成に拍車がかかっておりますし、また他のメディカル・スタッフの教育や研修にも力が注がれています。本学会も臨床生理学を通じて、時代が要請する医学や診療学を教授し、その役割の一端を担いたいと考えております。

このように日本臨床生理学会は、医学・医療を学ぶ学生、若い研修医や他の医療スタッフ、高い専門性を有する医師や看護師など職種を問わず、すべての医療人に、時代にふさわしい知識と情報を提供し、また研鑽する場でありたいと切望しております。